農聖二宮尊德

共編

敎育會
二宮神社

社會
德報

戰法縣
人社

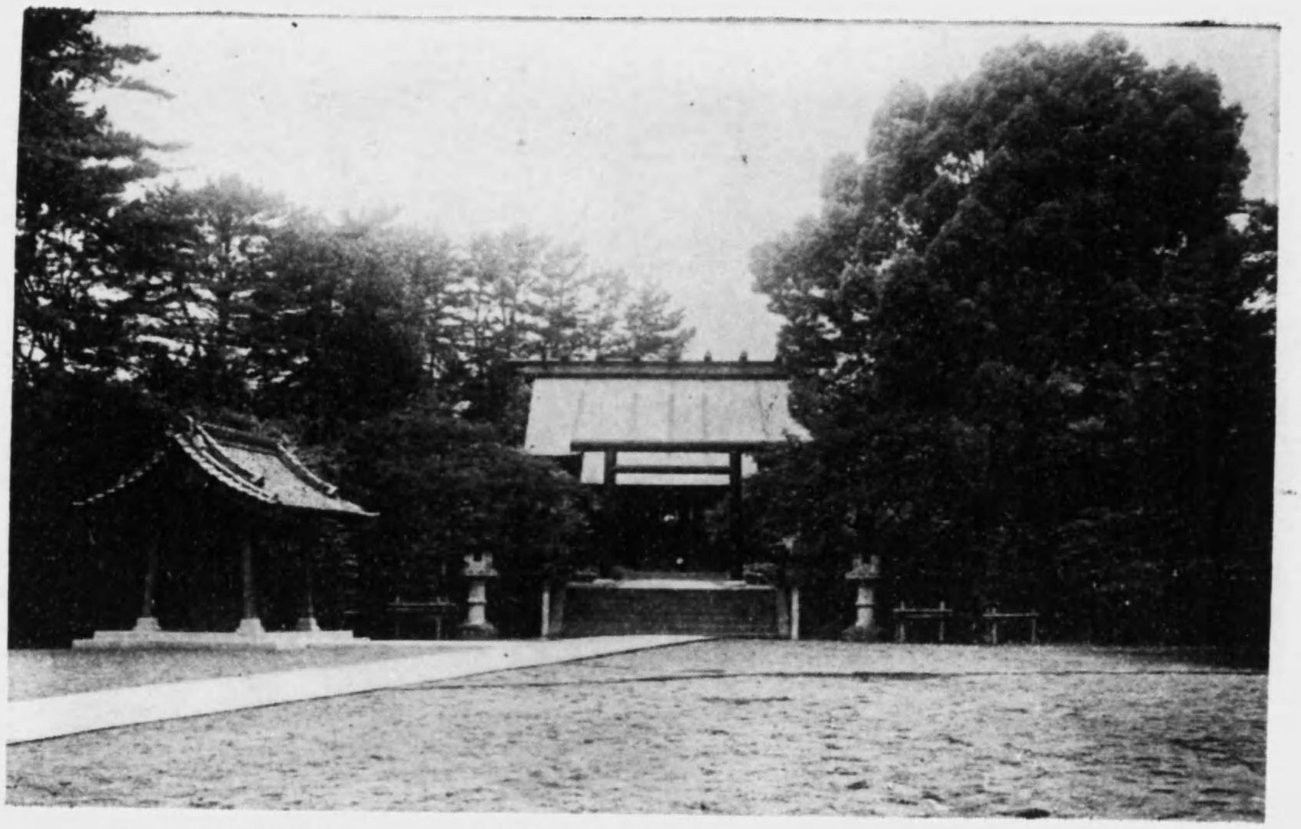
特252
43

始

特252
43

農聖二宮尊德

財團法人 社會教育會
縣社報德二宮神社 共編



縣社報德二宮神社　（小田原城趾内）

序

今年は、二宮尊德先生が亡くなられてから、八十年目に當つてゐる。

日本人の中に、二宮尊德先生の名を知らない者は、恐らくあるまいと思ふ。それほど、二宮先生は、我が國民に敬慕せられてゐる偉人である。二宮先生は、極めて貧しい家に生れて、苦學力行、りつぱな學者になり、その學問の理を實地に活用して、多くの人々を救はれ、歿後、神に祀られた。偉人といはれる者にも、いろいろあるが、かういふ偉人は、世界中にもたくさんなからう。

二宮先生のお話は、小學校の修身書の中に出てゐる。二宮先生のことを書いたものは、外にいくらもある。しかし、もつともつと、よく二宮先生の傳記や事業や敎へを知ることが、今日の我が國民には必要である。そこで、この八十年祭に當つて、「農聖二宮尊德」を出版して、これを天下に頒つことにした。

この書は、男女中等學校生徒、男女青年團員、小學校上級生等に、二宮先生のことを最もわかりやすく、且つ總括的に知らせるために書いたものである。前篇には、二宮先生が貧苦の間から身を起して、だんだんとりつぱな人物になつて行かれる立志美談、後篇には、人間の業とも思はれぬ二宮先生の大事業と、永久に光を放つ二宮先生の大敎訓との大要を述べた。從つて、前篇よりも後篇の方がいくらかむつかしい感じを與へるのも、內容の上からやむを得ないことであらう。

この書がひろく日本國民の敎科書のやうに普及して、二宮先生のことがなほ一そう國民に徹底し、國民生活の上に顯現するを得ば、國家のためにも、誠に喜ばしい。言ひ換へれば「二宮イズム」の現代化をはかる機緣となることを念ずる次第である。

昭和十年九月

財團法人 社會敎育會
縣社報德二宮神社

農聖二宮尊德

目次

前篇

一、一家の浮沈……（一）

酒匂川の大洪水——重なる不運——孝子のまごゝろ／報恩の草鞋——天無情（父の死）
母のしのび泣き（乳が張つて眠れない）——十二文のお金がない——悲痛の極み（一家
遂に離散）

二、更生の一路……（一七）

生れついての學問すき——百姓に學問はいらない（萬兵衞の言ひ分）——活きた學問
（旅僧の讀經に感じた話）——學問と實行（坂口堤に松苗を植ゑた話）——積小爲大（塵
もつもれば山となる）——更生の曙光が見えて來た——獨學の實力名主を驚かす——
一家の復興（近村に高まる評判）

三、出世の端緒……（三四）
小田原への往來——服部家の若黨となる——女中に飯の炊き方を教へる——服部家の家政整理——名聲藩内に聞ゆ

後篇

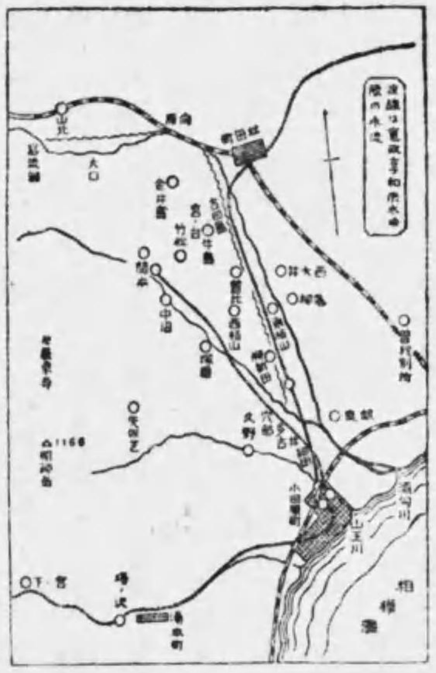
一、畢生の大事業……（四五）
大事業の發端——櫻町の復興——東奔西走（青木村の仕法——谷田部の仕法——烏山の仕法——下館の仕法——小田原の仕法——其の他の仕法）——幕府の登庸（日光の仕法）
二、榮光は輝やく……（五六）
二宮先生の臨終——報德教（萬世不易の實行精神）——榮光は輝やく（報德二宮神社）
三、偉大なる農聖……（六一）
全日本國民に敬慕せられる偉人——二宮先生はたゞの百姓の子——二宮先生は活きた學者——現代社會への大きな教訓

前篇

一、一家の浮沈

酒匂川の大洪水　東海道線の汽車に乘り、丹那トンネルをくゞつて東行し、神奈川縣へはいると酒匂川の鐵橋を渡る。この川は、昔、鞠子川ともいつた。源を靜岡縣の駿東郡に發し、初めは御厨川と呼んでゐる。神奈川縣の足柄上郡に入り、北方の丹澤山から南流して來る河内川と合し、酒匂川といふ名になり、峽谷の間を東方へ走つて、山北驛の南方に至り、平坦な低地に出て、吉田島・曾比・栢山を通り、足柄下郡に入り、酒匂村で海に注いでゐる。延長約十二里（四七キロメートル）廣さ下流に於て、二百間（三六三メートル）乃至三百間（五四五メートル）と稱せられてゐる。

この酒匂川には、昔から、時々、大洪水が出た。大雨が降ると、山の水が川に落ちて溢れ、その激流がもの凄い勢ひで、轟々と怒號して、川下へ押して行つた。その水は、堤防を破壞して、兩岸の村を浸し、人家を流し、田畑を荒した。その度毎に、水害地の農民は、いつも四苦八苦の憂き目に泣いた。せつかく丹精してつくつた田畑は、たつた一夜の中に、泥沼のやうになり、水がひいて



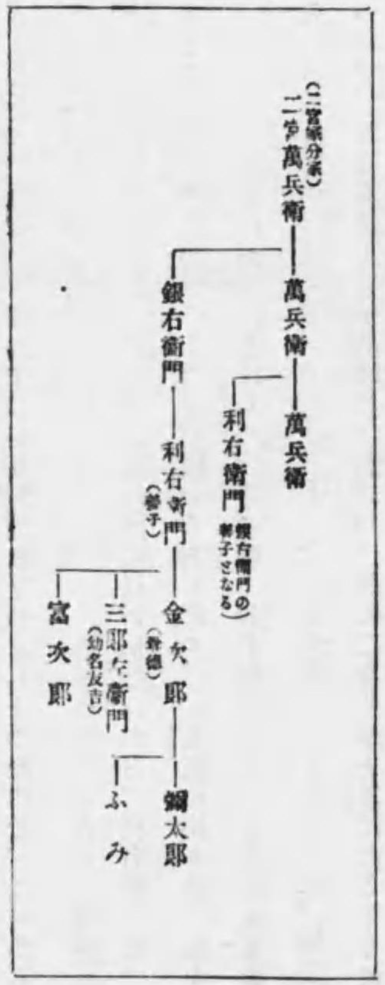
二宮先生の郷里

しまふと、流れ込んだ土砂のために、まるで河原と同様の荒地と變つてしまふ。それをもとのとほりの田畑にするには、一方ならぬ手數がかゝつた。その間、作物が穫れないので、食べる物にも着物にも不自由をしなければならなかつた。

寛政三年（西紀一七九一年）にも、この酒匂川に大洪水が起り、大口の堤防が切れて、どつと水が栢山の村へ流れ込んだ。栢山の農民の苦しみは、想像も及ばないほどであつた。その中でも特に氣の毒なのは、二宮利右衛門といふ人であつた。この利右衛門が、二宮先生のお父さんである。二宮先生は、當時、まだ五歳になつたばかりの幼兒で、名を金次郎といつてゐた。

重なる不運　利右衛門の家は、二宮の分家になつてゐた。栢山の二宮一族は、伊右衛門といふ人を總本家として、分家に分家を生じ、みなで十三軒もあつた。分家の萬兵衛から更に分家した銀右

衛門といふ人には、實子がなかつたので、本家の主人即ち自分の實兄（名は同じく萬兵衛）の次男にあとをつがせた。これが利右衛門である。



二宮の一族は、本家の方も、分家の方も、みな相當にりつぱなくらしをしてゐた農民であつた。殊に分家の銀右衛門は、勤勉儉約を守り、父から讓り受けた身代を、更に一そう殖やした。しかるに、養子の利右衛門は、村の人たちから「栢山の善人」と呼ばれたほどの溫厚質朴な人物であつた。この利右衛門の代になると、間もなく、天明四年の大飢饉が襲來した。心のやさしい利右衛門は、

他人の困窮を默つて見てゐることが出來ず、田畑を賣つて、お金を貸しつけた。ところが、貸したお金は、それつきりかへつて來ず、財產がだんだん減つてしまつた。そこへ、今度は、寛政三年の大洪水である。ちやうど、泣き面に蜂であつた。殘つてゐる田畑には、砂や礫がはいつて、見るもあはれな河原と變りはてた。住宅には、疊の上まで水がついて、床下で魚が泳いでゐた。財產が減つてゐるところへ、殘りの田畑がすつかり荒地となつてしまつたので、これから、利右衛門の家は、貧乏のどん底へ落ちて行つた。

荒地となつた田畑をそのまゝにしておくわけにはいかないから、利右衛門は、洪水が退いてしまふと、すぐにその復興にかゝつた。毎朝暗いうちに起きて、荒地に出かけ、石を掘り取り、砂を運び出し、少しづゝもとの田畑になほした。その時、利右衛門には、五歲になる金次郎（天明七年七月二十三日生）と、二歲になる友吉（後に三郎左衛門といふ）といふ二人の子があつた。金次郎のおかあさんは、毎日、友吉を負ひ、金次郎をつれて、おとうさんの手助けに出かけた。後に二宮先生と尊ばれるやうになつた金次郎は、かういふあはれな家に育つたのである。

荒地の復興は、五年目にやうやく終つた。田畑は、やつともとのとほりになり、作物も穫れるや

二宮先生の生家

うになつたが、また一つ困つたことが出來た。あまりに無理をして働き過ぎたので、主人の利右衛門が、病氣にかゝり、床に就いてしまつたことである。貧乏な家で、たつた一人の働き手が病んでは、どうすることも出來ない。二宮一家に降りかゝつて來た重なる不運、それは聞くも痛ましい話である。

孝子のまごゝろ——報恩の草鞋　利右衛門の病氣は、はかばかしくない。少しよくなつたかと思へば、また惡くなり、長い間ぶらぶらしてゐた。その中に、また富次郎といふ子が生れた。

金次郎は、その時、十二歲になつてゐた。家は貧しく、おとうさんは、長い間の病氣、幼ない弟は

二人になつた。金次郎は、毎日、縄をなつたり、草鞋をつくつたりして、お醫者さんに拂ふ薬禮や家の生計の足しにした。

柏山の村の人たちは、相談した。

「いつも、大雨が降る度毎に、洪水が出て、田畑をつぶされては、やりきれないから、どんなに大雨が降つても、堤防が切れないやうにしたいものだ。」

「ほんとにさうだ、しつかりした堤防を築くことにしよう。」

「みんな力を協せたらきつと出來るだらう。」

村の人たちは、協同して、川ぶしんをすることにきめた。そこで、一戸から一人づゝ人足を出して、先づ堤防の工事をはじめることになつた。

利右衛門は、それを聞いて、

「村のために、みなさんが出て川ぶしんをなされるのに、わたしは、病氣で出ることが出來ない。まことに相すみません。お役には立ちますまいが、悴の金次郎をわたしの代りにお使ひ下さい。」

と申し出た。かういふ場合に、大人が出られないと、子どもを代役に出すのは、當時の習慣であ

つた。しかし、金次郎は、まだ十二歳になつたばかり、外の役ならとにかく、川ぶしんのやうな仕事には、全く無理であつた。けれども、村の人たちは、みんな利右衛門一家の事情を知つてゐるので、たれひとり苦情をいふ者もなかつた。

いよいよ酒匂川の川ぶしんがはじまつた。金次郎は、毎日、川堤へ出て、大ぜいの大人の間にまじり、石を堀り出したり、土を運んだり、まめまめしく働いた。村の人たちは、金次郎をかはいさうに思つて、親切にいたはり助けた。おとうさんは、大そう喜んで、

「あんな一人前の仕事も出來ない子どもを、大事な役に出しておくのに、いやな顔もせず、いろいろ面倒を見てくださる……　ありがたいのは、村の人々の御親切だ。金次郎！　村の人々の御恩を忘れてはなりませんぞ。」

と、金次郎にいひきかせた。

金次郎は、おとうさんからお話を聞くまでもなく、大人のやうに仕事の出來ないのを、とがめようともせず、親切にしてくださる村の人々の恩をよく知つてゐた。どうかして、その恩がへしをしなければならないと思つた。そこで、金次郎は、毎晩、家へかへつてから、せつせと草鞋をつくり

草鞋をつくつて村の人に恩を報じ

あくる朝、早く起き、まだだれも出てゐないうちに、土堤へ行つて、その草鞋を落して置いた。さうしておいたら、村の人が仕事をしてゐて、草鞋の破れた時に、拾つて穿くであらうから、自然にいくらか恩がへしが出來る、と考へたのであつた。ところが、村の人は、新しい草鞋が一足づゝ落ちてあるのを見て、

（これは、きつとだれか落したのだらう……）

と思ひ、拾つて穿かうとする人もなかつたのである。

せつかくの志がむだになつたので、金次郎はがつかりしたが、よく見てゐると、草鞋といふものは、片足づゝ破れることが多く、片足破れると

だれもみなそこらに落ちてゐる片足を拾つて穿いた。そこで、金次郎は、草鞋の緒をすげ、すぐに穿けるやうにして、片足づゝあちらこちらへ落しておいた。村の人たちは、金次郎がわざと落しておいたものとも知らず、草鞋が片足破れると、すぐにそれを拾つて穿いた。

僅に十二歳の子どもが、大人と一しよに一日働きつゞけ、くたくたに疲れきつてかへり、夜おそくまで草鞋をつくり、人知れず土堤に落しておいて、村の人に恩がへしをしようとしたのは、如何にも涙ぐましい美談である。「梅檀は二葉よりかんばし。」といふのは、金次郎のやうな人をいふのであらう。

天無情——父の死　そのあくる年、金次郎が十三歳になつた時、おとうさんの病氣は、大分よくなつて、弟の富次郎が生れた。一家の者が喜びあつたのも、ほんの束の間の夢であつた。次の年（寛政十二年）になると、またおとうさんの病氣が再發して、今度は、だんだんと重くなつて行つた。金次郎も、おかあさんも、非常に心配して、夜の目も寢ずに看護したが、病勢は、日に日につのり、九月二十六日に、利右衛門は、たうとう四十八歳を一期として逝去した。あとに殘つたのは、三十四歳になるおかあさん、十四歳になる金次郎、十一歳になる友吉、生れて間もない二歳の富次郎の

四人であつた。主人がなくなつて、女と子どもばかりが残つたのである。長い間の病氣にお金もたくさんかゝつたのみならず、その年の六月、また洪水が出て、少しばかりの田畑は荒されてゐた。財産が全くなくなり、借金が殘つてゐるだけの家に、乳呑兒を抱いて、一家四人の生計を立てゝ行かなければならなくなつたおかあさんの苦勞が思ひやられる。

母のしのび泣き——乳が張つて眠れない　どうしてよいかわからず、途方にくれてゐるおかあさんに、親類の者がいつた。

「何しろ、赤ん坊があつては、仕事も出來なからうから、富次郎だけ、よそへあづけることにしたらどうか？」

子どもを手もとから放すのは、おかあさんにとつて、一ばんつらいことであるが、さうするより外に、よい方法もなかつたので、おかあさんも、親類の人たちのいふとほりに、富次郎を里子に出すことにした。富次郎は、おかあさんの弟に當る、西栢山の奥津甚左衛門といふ人が預ることになつた。

おかあさんは、富次郎を西栢山へつれて行つた。やがて、歸つて來て、

「さあ、これで、おかあさんも、手足まとひになる者がなくなつた。これから自由に働くことが出來る。みんなでせい出して働いて、この家をもとのとほりにしよう。」

と、金次郎に語つた。

ある夜、金次郎がふと目をさまして見ると、おかあさんは、床の中で、まだ眠つておいでにならない樣子、時々、しのび泣きの聲が聞えて來た。

「おかあさん！　まだおやすみにならないのですか？」

と、金次郎がたづねると、おかあさんは、

「今夜は、どうも、寢つかれなくてね……」

とお答へになつた。

「どこか、お悪いのではないのですか？」

金次郎が、再びたづねると、

「いゝえ、どこも悪くはありませんが、たゞお乳がはつて、痛くてしかたがないのです。けれども、これは、四五日たてば、なほるでせうから、心配しなくてもよいのです。」

といふおかあさんの答へであつた。

金次郎は、はつと胸をつかれたやうに感じた。

（おかあさんは、やはり、富坊のことを心配していらつしやるのだ……）

と思ふと、金次郎は、たまらなくなり、

「おかあさん！」と叫んだ。

「あの富次郎をうちへつれもどすことにしてください……　おかあさんのお乳が張つて痛いやうに、富次郎は、今ごろ、きつとおなかが空いて泣いてゐるでせう。おかあさんのおつしやるとほり、赤ん坊がゐなければ、それだけ手數はかゝらないでせうが、赤ん坊の一人ぐらゐゐたからといつて、お金がたくさんいるわけでもありません。わたくしが、明日から早く起き、久野山へ行つて薪を取り、それを賣つてお金をもうけます。富次郎は、うちへつれて來て、みんなで世話をしてやりませう……」

金次郎の健氣な心は、おかあさんをどれくらゐ喜ばせたか知れなかつた。

「お前がさういつてくれるならば、富次郎は、うちへつれて來ませう。さうきまれば、少しでも

早い方がよいから、わたしは、これからすぐに富次郎を迎へに行つて來ます。」

ちやうど、その時は、子の刻といつて、今の十二時頃であつたから、金次郎は、おどろいて、

「おかあさん、今夜は、もうおそいから、明日まで待つてください。夜が明けると、わたくしが行つてつれて來ますから……」

ととめた。おかあさんは、聞き入れず、

「いゝえ。西栢山まで行つて來るくらゐ、何でもないことです。すぐに行つて來ます。」

といつて、起き上り、富次郎を迎へに、暗い夜道をかまはずに、出て行かれた。

「おかあさんは、それほどまでに富坊のことを思つておいでになつたのか……」

と、金次郎は、子どもながらに、子を思ふ親の心に涙ぐんだ。

十二文のお金がない　それから、金次郎は、毎日、朝早く起きて、栢山から一里（三九二七メートル）ほどもある久野山へはいつて薪を取り、これを小田原の町へ運んで賣つた。晝間は、おかあさんと一しよに、ほんの少しばかり殘つてゐる田畑を耕作し、夜は、縄をなひ、草鞋をつくつた。かうして朝から夜まで、しつきりなしに働きつゞけたが、子どもの力で、一家の生計を立てゝ行くのは、並大

抵のことでなく、働いても働いても、お金が足りないばかり、年から年中、貧乏に追ひかけられてゐた。

その中に、一年半の月日がたち、享和二年の春を迎へて、金次郎は、十六歳になつた。その頃、栢山のあたりでは、正月になると、大神樂が來て、各戸を廻り、五穀豊饒、家内安全のお祈りをした。その大神樂がやつて來ると、舞ひをさせる家では百文、拒絶する家では少なくも十二文(今の約三四十錢位)を出すのが、習慣になつてゐた。その年も、例年のとほり、大神樂の一隊が栢山へはいつて來た。笛や太鼓の音が近く聞えたので、金次郎は、

「おかあさん、神樂が來ましたね。お金をやるんでせう……」

といつた。

「銅錢を十二文やることになつてゐる……」

と、おかさんの答へ。

「そのお金がありますか?」

「十二文くらゐは、どこかにあつたか知れない。」

といつて、おかあさんは、針箱の中や、神棚を探したが、十二文どころか、一文のお金もなかつた。

「さあ、困つたことになつた…… どうしたらよからうか?」

おかあさんが考へ込んでいらつしやると、金次郎がいひ出した。

「おかあさん! いくら貧乏してゐても、かうして一戸をかまへてゐれば、お金がないといつてことわるわけにもいきませんから、いつそのこと、戸をしめて、留守のやうに見せかけてはどうでせう?」

おかあさんは、笑つて、

「しかたがない。お前のいふとほりにしよう。」

と、賛成した。

大神樂の笛や太鼓の音は、だんだん近づいて來た。おかあさんと金次郎とは、急いで戸をしめた。四歳になつたばかりの富太郎は、わけを知らずに、「お神樂を見るのだ。ねんねするのはいやだ。」といつて、駄々をこねてゐた。それをなだめすかして、やつと寢床の中へ入れ、親子四人は

じつと息をころしてゐた。やがて、大神樂の一隊は、金次郎の家の前へ來て、外からどんどんと戸をたゝいたが、返辭がないので、

「こゝの家は、留守だと見える……　ではためだ……行かう……」

といつて、通り過ぎた。中にかくれてゐた母と子は、ほつと安心した。もし、富次郎が聲でも立てたらどうしよう、と、おかあさんの苦勞は、一ととほりでなかつたのである。

悲痛の極み——一家遂に離散　かうしたみじめな目にあつて、子ども心にも、つくづく貧乏の苦しみを悟つた金次郎の家には、間もなく、また悲しい事件が起つた。三月の下旬に、おかあさんはふとした病氣にかゝり、たつた十日ほど(三月二十五日頃から四月四日まで)床に就いてゐたきりで、死んでしまつた。あとには、三人の孤兒が、相抱いて泣いてゐるだけであつた。何といふ悲慘な話であらう。天は、二宮家に度々不幸を下して、さんざん苛め拔いておきながら、まだ苛め足りなかつたのであらうか？否、さうではない。これは、天が二宮金次郎の人物試驗をしたのであつた。古い歌に、「うきことのなほこの上につもれかし、限りある身の力ためさん」といふのがある。かうした苦勞を堪へ忍んだので、はじめて二宮尊德といふ大きな人物が生れて來たのである。

父も母もなくなり、子どもばかりがあとに殘つたので、親類の者が見るに見かねて相談をした。

「子どもだけになつては、ほつておくわけにもいくまい。親類のうちに引き取つて、しばらく面倒を見てやらうではないか……」

といふことに一決した。そこで、金次郎は、叔父さんの萬兵衛といふ人の家に引き取られ、二人の弟は、おかあさんの實家の川久保家へ引き取られることになり、たうとう一家離散の憂き目を見るに到つた。

二、更生の一路

生れついての學問ずき　世の中に何が不幸であるといつても、少年の頃、兩親を失つた孤兒ほど不幸な者はあるまい。金次郎は、十四歲の時におとうさんを失ひ、十六歲の時におかあさんを失ひ叔父さんの家に引き取られた。どこまで運のわるいことであらう。

その年の六月にまた洪水が出て、殘つてゐた少しばかりの田畑が悉く濁流に押し流されて、砂礫

に埋沒してしまつた。

萬兵衛の家に引き取られた金次郎は、毎日、せい出して働いた。さうして、夜になると、おそくまで寢ないで、本を讀み、文字を習つた。

金次郎は、大そう學問のすきな子どもであつた。その頃は、今のやうに學校といふものがたくさんなかつたので、學問をするのも容易なことではなかつた。殊に、金次郎は、貧しい家に生れて、幼ない時から、繩をなひ、草鞋をつくり、おとうさんの手助けをしたので、學問をしてゐる暇もなかつた。けれども、金次郎は、常に學問といふことを忘れず、少しの暇にも、本を讀み、手習ひをした。家が貧乏で、紙や筆にも不自由をしてゐたので、金次郎は、手習ひをするにも、文庫の掛子に砂を盛り、箸で文字を書いた。金次郎が、六歳か七歳の頃、手習ひをしたといふその文庫が、今でもなほ足柄下郡久野村の或る家に殘つてゐるさうである。金次郎は、生れついての學問すきであつた。

生れついての學問すきで、暇さへあれば、本を讀み、手習ひをしたので、その進境も著しく、萬兵衛の家へ來た頃には、もうよほどむつかしい本でも讀めるやうになつてゐた。

百姓に學問はいらない——萬兵衛の言ひ分　叔父さんの萬兵衛は、大そうやかましい人であつた。子どもがないので、子どもに對する愛情が薄く、十六歳になつたばかりの金次郎に、びしびしと小言をいつた。

金次郎が、毎夜、おそくまで、學問をするのが、萬兵衛には氣に入らなかつた。

「お前のやうに、いつまでも起きてゐては、油がいつてかなはない。お前は、人のお世話になつてゐる身ではないか。よけいなお金のかゝることは、やめてもらひたい。」

と、萬兵衛から小言が出た。金次郎は、すなほに、

「はい、わかりました。これから、氣をつけます。」

と答へたが、學問をやめる氣にはなれない。そこで、金次郎は、考へた。

（自分は、今、人の世話になつてゐる者だ。叔父さんのいはれることも無理ではない。しかし、今のうちに學問をしなければ、一生りつぱな人にはなれない。叔父さんが小言をいはれるのも、油をつかふので、よけいなお金がかゝるからだ。お金さへかゝらなかつたら、叔父さんだつて、何ともおつしやらないであらう。）

そこで、金次郎は、ある日、村の人から油菜の種を少しばかりもらつた。さうして、その種を川堤の空地に蒔きつけ、暇な時に行つては、手入れをした。種は、やがて芽を出し、花を開き、實を結び、夏の頃になると、七八升ほどの菜種がとれた。意外の收穫に、大喜びの金次郎は、これを隣村(小豪)の油屋嘉右衛門のところへ持つて行つて、燈油と取りかへてもらつた。

(油さへあれば、夜學をしても、叔父さんから叱られる心配はない。)

と安心して、金次郎は、再び前のとほりに夜おそくまで讀書をした。

萬兵衛は、これを見て、

「さうして、毎夜、夜ふかしをすると、身體のために毒で、あくる日の仕事にさはる。一たい百姓の子が學問をして何の役に立つのだ。學問といふものは、お武家さまや名主さまのすることで、百姓にはいらない。本を何冊讀んだとて、一文の錢にもならないぢやないか。本を讀む暇があつたら、縄の一房、草鞋の一足もつくるがよい。」

といひ出した。今日とちがつて、まだ世の中の開けない時のことだから、田舍の百姓のうちには、かういふ考へを抱いてゐた人が、たくさんあつたのである。

行燈に着物をかけて書を讀む

油までも工面して、夜學をしようとした金次郎の苦心は、叔父さんの一言で、水の泡となつた。けれども、金次郎は、まだ學問を中止しようと思はなかつた。

叔父さんからまた夜學をとめられて、金次郎がしをしをとしてゐると、從弟の圓藏(萬兵衛の子)といふ者がこつそりと着物を持つて來て、行燈にかけてくれた。圓藏は、日頃から、金次郎に、大そう好意をもつてゐたのである。

金次郎は、それから、毎夜、行燈に着物をかけて、夜おそくまで、時には夜明け近くまで、熱心に勉强した。

金次郎が、後に大學者となつたのは、かうした

勉強の結果であつた。古語に「精神一到何事か成らざらん。」といふのがあるが、まことに人の一念ほど恐ろしいものはない。

活きた學問——旅僧の讀經に感じた話　金次郎は、學問の仕方が、普通の人とちがつてゐた。當時の人々は、學問といへば、むづかしい書物をすらすらと讀み、文字を上手に書くことだけのやうに考へてゐた。ところが、金次郎は、書物の內容をよく咀嚼消化して、これを實踐躬行することに力めた。金次郎の學問は、世の中のためになる活きた學問であつた。

金次郎は、ある時、飯泉(足柄下郡豐川村)といふところにある觀音堂へお詣りをした。その時に、一人の旅僧が熱心にお經を讀んでゐたので、金次郎は、靜かにそれを聽いてゐたが、お經がすんでしまふと、

「失禮ですが、あなたは、どちらのお方でございますか？」

とたづねた。旅僧が答へた。

「はい。わたくしは、諸國をめぐる旅の者です。」

金次郎が、重ねて、

「今のお經は、何といふお經でございますか？　わたくしは、今のやうなありがたいお經を、こ

れまでに一度も聽いたことがありません。」

とたづねると、

「わたくしが、今讀んだのは、觀音經といふお經です。」

と、旅僧が答へた。

「觀音經なら、わたくしも時々聽きましたが、どうも、今のお經と少しちがふやうに思ひます。」

と、金次郎がいふと、旅僧は、

「お經の讀み方には、二通りあります。普通の讀み方は、音讀ですが、わたくしが今讀んだのは訓讀といふのです。」

と、親切に敎へた。金次郎は、大に喜んで、

「どうぞ、もう一度讀んでお聽かせください。」

といつて、その時に持つてゐた二百文の錢を出し、旅僧に與へ、お經の再讀を乞うた。

金次郎は、栢山へ歸つてから、善榮寺といふお寺へ行つて、考牛和尙に面會し、

「和尙さん！　觀音經といふお經は、ほんたうにありがたいお經ですね。觀世音さまの御德の廣

旅僧の讀經に感じ

大無量なことを、わたくしは、あのお經によつて、はじめて知りました。佛さまのお心も、やはり大ぜいの人の濟度といふことにあると見えますね。」

といつたので、和尚さんは、驚いて、

「お前は、えらいことを知つてゐるな……一たい、それは、だれに聞いたのだ？」

とたづねた。金次郎が、旅僧の話をすると、和尚さんは、非常に感心して、

「わしは、六十歳を超えた老人で、何十年といふ間、朝夕、このお經を讀んでゐるが、お前ほどはつきりとわけを知らない。お前の賢明には全く感心した。この寺へ來て、坊さんになつて

はどうだ？」

とすゝめた。金次郎は、頭を左右にふつて、

「御親切は、ありがたう存じますが、わたくしには、潰れた二宮の家を興し、祖先の靈を安んずる大切な役目があります。せつかくのありがたいお志ですが、おことわり申し上げます。」

ときつぱり謝絶した。この一つのお話を聞いても、金次郎の學問が、本を讀み、手習ひをするだけの學問とちがつてゐたといふことがわかる。このお話は、金次郎が、十四歳の時のこととともいひ、十八歳の時のこととともいひ、はつきりしてゐない。

學問と實行——坂口堤に松苗を植ゑた話　金次郎の學問については、もう一つ外の人とちがつた點があつた。それは、本を讀んで、よいと思つた道理を、どしどしと實行したことである。金次郎が、後に、たゞの物識り學者にならないで、人のため世の中のために、全力を擧げて活動した活きた學者となつたのは、少年の頃から、この實行といふ精神に富んでゐたからである。

この話も、金次郎が何歳の時のことか、はつきりわからない。まだ萬兵衛の家へ來ない前の話であらうともいふ。ある日、金次郎は、ひとりでぶらぶらと酒匂川の坂口堤をかへつて來る途中で、

坂口堤の松並木（二宮先生が幼時松苗を植えた所）

苗木賣に逢つた。その苗木賣が大そう困つたやうな顔をしてゐるので、金次郎が事情をきくと、

「賣は、松の木の苗を二百本ばかり持つてゐるのですが、賣れないので、困りはてゝゐます。」

と答へた。

その時に、金次郎は、ふと思ひついた。

（この川堤へ松の木の苗を植えておいたら、やがて、その松の木が大きくなつて、根を張り、洪水が出ても、堤がきれなくなるであらう。）

金次郎は、その時に、二百文のお金を持つてゐた。このお金は、金次郎がよその家の子守をしてもらつたお金であつたといふ。

「わたしは、こゝに二百文持つてゐる。このお

金で、その松苗をわたしに賣つてください。」

と、金次郎が突然いひ出したので、苗木賣りもちよつと驚いたが、もてあましてゐた苗であるから、喜んで金次郎に賣つた。

金次郎は、すぐにその松苗を堤に植えつけた。年はもいかない少年が、何十年も後のことを考へて、働いてもうけた貴いお金を惜しげもなく投げ出し、松苗を買つて堤に植える。感心な話ではないか？　しまひに偉くなる人は、子どもの時から、心がけがちがつてゐる。金次郎が、この頃から如何に實行といふ精神の盛んな少年であつたかといふことが、このお話によつてよくわかる。

當時、金次郎は、暇さへあれば、この川堤へ出た。休日などに、村の子どもたちが集まつて面白さうに遊んでゐる時にも、金次郎は、ひとりぎり、堤へ出て來て、河原を歩いたり、草の上で本を讀んだりした。酒匂川は、栢山の村を、二宮の一家を、度々苦しめた怨敵である。この川堤を強固にして、永久に水害の憂ひを除きたいといふ考へが、金次郎の心に燃えてゐたので、自然に足がそちらへ向いたのであつた。この川堤は、北に丹澤山系をめぐらし、西に足柄箱根の連山を望み、毅然として聳ゆる富士の靈峯をその間に仰ぐ、秀麗の境であつたから、こゝを逍遙してゐる間に、自

ら清淨な氣分が起り、剛健な意志が養はれた。酒匂川の川堤は、金次郎の遊び場所であり、同時に修養の道場であつた。金次郎がいつも土堤へ行つてゐるので、村の人は、金次郎に、土堤坊主といふ綽名をつけた。

金次郎が坂口堤に植ゑた松苗は、りつぱな並木になつて、今日でも殘り、通る人々に、二宮先生の少年時代を追懐せしめてゐる。

積小爲大——塵もつもれば山となる　金次郎が萬兵衛の家に來てから、一日も忘れないのは、どうかして早く自分の家をもとの通りに興したいといふことであつた。一家の復興、それを、金次郎は、寢ても覺めても思ひつめてゐた。

どうすれば、一家の復興が出來るか？　少しばかり殘つてゐた田畑は、洪水のために砂礫に埋もれてしまつた。外に財産といふものはない。金次郎は、まだ少年の身である。どうしてこの家がもとの通りにならうか？　だれでも、ちよつとどうしてよいかわかりますまい。けれども、金次郎は、賢い少年であつた。意志の非常に强い少年であつた。晝は、叔父さんの家業を手傳ひ、夜は、學問をしながら、一家復興の道を考へ出した。一つかみの種を蒔いておいても七八升の菜種が穫れた——

といふ經驗から、金次郎が考へついたのは、積小爲大——といふことであつた。これは、「小を積みて大と爲す。」わかりよくいへば、昔からある「塵もつもれば山となる。」といふ諺と同じ道理である。

潰れた家を興すには、先づ小を積みて大と爲し、ぢりぢりと一歩づゝ進まなければならない——と思つて、金次郎は、休みの日に、荒地となつてゐる田圃を耕やし、村の人が捨てた稻の苗を植ゑつけた。さうして、少しでも暇があると、その田圃を見まはつて、勞力を惜しまずに、いろいろ世話をした。

（人が捨てたやうな苗でも、かうして世話をす

荒地を耕して捨苗を植ゑる

れば、きつといくらかのお米がとれるにちがひない。)
と思つた。果して、その秋には、一俵あまりの米が穫れた。金次郎の喜びは、一とほりでなかつた。

更生の曙光が見えて來た　金次郎は、その一俵あまりの米を、貧しい人に無利子で貸して、保管を頼んだ。利子なしに物を借りるのは、貧しい人々にとつて、何よりもありがたいことであつたから、だれでも喜んで借りた。さうして、いつでも、入用の時には、新らしい米を返へすことを誓つた。

金次郎は、一年半ほど、萬兵衛の家にゐたが、その後、そこを去り、同じ村の岡部善右衛門といふ人の家に雇はれ、更にまた二宮七左衛門といふ人の世話になつた。二人ともに金次郎の親類に當つてゐた。

その間に、金次郎は、荒地の回復につとめ、だんだん米の收穫をふやした。最初の年に一俵あまり穫れたのが、次の年には、五俵ほどの收穫になつた。年々、收穫が增加して來た上に、保管してある米がたまつて、三四年の中には、二十俵といふ數になつた。苦しみのどん底から漸く浮び上つ

た金次郎の前途には、だんだん鄙かしい更生の曙光が見えて來た。

獨學者の力名主を驚かす　金次郎は、忙しい仕事の間にも、學問を忘れなかつた。山へ薪を採りに行く時にも、堤へ草を刈りに行く時にも、書物を持つて行き、休む暇にそれを開いて讀んだ。時々、書物を讀みながら、道を歩いたので、村の人たちは、金次郎の學問ずきに驚いてゐたといふ。

教へを受ける先生もなく、しかも、仕事の暇に勉强するほんたうの獨學であるから、その苦心は一とほりでなかつた。金次郎が少年の頃讀んだ書物が、今でも栢山に殘つてゐるが、それを見ると、表紙も本文も破れて讀めなくなつたところがある。むつかしい文字の側には、片假名で音訓を書き入れたところもあり、意味を記入したところもある。例へば、「君子」といふ文字には、「ヨキヒト」としてあり、「頗」といふ文字には「コウダイノ德」としてある。これらの書物を見ても、苦心のほどが察せられる。

かうした苦しい獨學をしただけに、學問の力が非常に進み、十八九歳の頃には「大學」や「論語」のやうなむつかしい書物の內容を、明瞭に理解するほどになつてゐた。

岡部善右衛門は、萬兵衛と違つて、大そう學問の好きな人であつた。しばしば諸方から學者を迎

二宮先生少年時人愛讀の「大學」

へて、子どもの伊助に、書物の講義を聽かせたので、金次郎も、度々座敷の外でそれを聽いた。ある日、講義がすんで、先生がおかへりになつたあとで、伊助は、ひとりで復習をしてゐた。ところが、その一節に、意味のわからないところが出て來たので、おとうさんにたづねた。學問すきのおとうさんにもわからず、困つてゐるところへ、金次郎が出て來て、

「どの文句ですか？　わたくしに見せてください……」

といつた。おとうさんも、伊助も、

（わたしたちでわからない文字が、お前さんにわかるものか……）

と思つたが、金次郎があまり熱心に問ふので、伊助がその文句を讀んで聽かせた。すると、金次郎は、しばらくじつと考へ込んでゐたが、やがて、すらすらとその意味を述べた。岡部父子は、金次郎の實力に驚き入つたといふ話である。

一家の復興——近村に高まる評判　かくの如く學問は次第に進み、いくらかの財産も出來た。金次郎は、もはやりつぱな青年になつた。もうよその家の厄介になつてゐる必要はなくなつた。そこで、金次郎は、はじめて自分の家へかへつた。ちやうど三年半ほど、よその家の世話になつてゐたことになる。

三年以上もすてゝあつたので、軒は傾き、壁は破れ、屋敷は草に埋もれ、人のすみかとも思はれないほど荒れはてゝゐた。金次郎は、その荒れはてた家をつくろひ、そこに住み、一生懸命に働いたので、お金もいくらかづゝたまり、だんだんくらしむきがよくなつて來た。たまつたお金で、金次郎は、前に失つた田畑を少しづゝ買ひもどして行つた。二十歳の時（文化三年）には、質入れがしてあつた九畝十歩の田地を三兩で買ひもどし、二十三歳の時（文化六年）には、更に三反八畝八歩の田地を買ひもどし、そのあくる年には、また三反二十歩の田地を買ひもどしたので、總計一町四反五畝二十五歩

の地主となつた。かくして、こゝに一家の復興は、りつぱに完了したのである。

二十八歳の時（文化一年）に、金次郎は、曾我別所村に預けてあつた弟の友吉を呼びかへした。もう一人の弟の富次郎は、幼ない時から大そう悧口な性質であつて、多くの人々に末頼もしい少年と思はれてゐたが、七年前（文化四年）に痘瘡を病んで、僅かに九歳で死亡した。それで、金次郎の弟は、一人ぎりになつてしまつたのである。この友吉は、後に親類の三郎左衛門の養子となつた。名前が三郎左衛門とかはつたのは、それからのことである。

金次郎が、數年の間に、潰れた一家をもとのとほりに立てなほしたので、村の人たちは、みんな驚嘆した。金次郎の評判は、それからそれへと傳はつて行つた。

三、出世の端緒

小田原への往來　一たん潰れた二宮家を復興して、一家の主人となつた金次郎は、家業を勵みながら、ますます學問に熱中した。學問と經驗とによつて悟つた「積小爲大」の道理に從つて、みご

とに自分の一家を復興した。しかし、もつと多くのよい書物を讀んで、その中に書いてある道理を味はひ、進んで世の中の人々を救ひたいといふ心が、だんだんと強くなつて行つた。けれども、その頃は、今日とちがつて、書物の少ない時であつた。栢山の田舍では、書物を自由に見ることも出來なかつた。そこで、金次郎は、柴や薪を賣りながら、小田原の町へ出かけた。

小田原は、當時、大久保加賀守忠眞公の城下になつてゐる文化の中心地であつた。こゝに住んでゐる藩士の中には、農民とちがつて、學問に心を寄せてゐる者もたくさんあつた。金次郎は、柴や薪を賣りに、それらの藩士の邸に出入し、珍らしい書物を讀み、學問のよく出來る人の話を聞いて、自分の學力を高めようと考へた。それで、學問の好きさうな人を見ると、すぐに書物の話などをしかけた。藩士たちの間には、

「百姓の子でありながら、書物が讀める、感心な男だ。」

といつて、金次郎のことを褒める者が多くなつた。

服部家の若黨となる　小田原藩の家老に、服部十郎兵衛といふ人があつた。三人の子の世話をさせる若黨を探してゐた時に、金次郎の話を聞き、その意を通じた。金次郎は、大に喜んで、すぐに

承諾した。それは、金次郎が二十六歳のことである。

服部家の若黨となつた金次郎は、毎日藩の學校へ通ふ三人の子の送り迎へをした。三人の子の授業時間には、講堂の窓下に立ち、ひそかに中から漏れる聲を聽いた。夜は、また三人が讀書する傍にすわり、質問に答へた。故に、たゞの雇人ではなく、一種の家庭教師であつた。

その頃、金次郎は、年々財産がふえて、くらしに餘裕が出來たので、貧しい藩士にお金を貸したり、經濟上の助言を與へたり、多くの人のために、いろいろな便宜をはかつてゐた。仲間や女中の中にも、時々、金次郎に、お金を立て替へてもらふ者があつた。また金次郎に給金を預けて、それをよい利廻りの貸金に周旋してもらふ者もあつた。

金次郎は、また五常講といふものを組織した。これは、人倫五常の道による貸借で、今日謂ふところの信用組合の一種である。藩中の仲間、若黨から、下女下男はもちろん、士分の者まで、この講に加入するやうになつた。

女中に飯の炊き方を教へる　金次郎が、如何に經濟上の細かい考へを持つてゐたかを證據立てる次のやうな話が傳はつてゐる。ある時、藩士の家に雇はれてゐる女中が來て、金次郎に、

「小遣錢を少しばかり貸してください。」

といつた。金次郎は、親切に小遣錢の入用なわけを聞いてから、

「あなたは、どうして、借りたお金を返すつもりですか？」

とたづねた。

「お給金をいたゞいた時におかへしします。」

と、その女中が答へた。ところが、女中の給金は、既に親元から前借りがしてあることがわかつた。それを知つた女中は、お金をかへす途がなくては、借りることも出來ないと思つて、大そう力を落した。金次郎は、

「さう力を落さなくてもよろしい。お金は貸してあげる。」

「でもお返しすることが出來ないでは、お氣のどくですから……」

と、女中が答へた。

「心配しなさるな……　わたくしが返すことを教へてあげる。」

「え？」と、女中は、びつくりしたやうに、金次郎の顏を眺めた。

「それは、かうするのだ。あなたは、主人にお願ひして、薪炭の費用を一日いくらで請負ふがよい。さうしておいて、御飯の炊き方を研究して、薪炭の費用を節約するのだ。あなたは、今まで御飯の炊き方を研究したことがありますか？」

「いゝえ……」

「それだからいけない。御飯を炊く前には、先づ釜の尻をがりがりと掻いて、炭を落すのだ。さうして、いよいよ火を燃す時には、なるべく薪をよく燃して、煙を出さないやうにするのだ。三本の薪で釜の底に火がまるく當るやうにするのだ。それから薪を引いてからの火力や消炭をうまく利用するのだ。さうすると、薪炭の節約が出來る。節約した薪炭は、わたくしが一度買ひ上げて、再び主人に賣つたことにすればよい。」

と、金次郎は、女中に教へました。これは、一つの傳說であるが、この話によつても、金次郎の心がけが推し測られる。

服部家の家政整理　服部家の祿高は、千二百石であつた。當時、千二百石の祿といへば、藩主から千二百俵の御渡米を受けるのがあたりまへになつてゐたが、小田原藩主の財政不如意や、いろい

ろの理由によつて、服部家は、僅に四百三俵を頂戴してゐるのみであつた。祿高の三分の一しか實際の收入がなかつたのである。しかも、服部家の主人の十郎兵衛は、經濟のことに疎い人であつたから、年々借金がふえて行つた。じつとしてゐると、借金のために破產しなければならないやうな狀態になつたので、服部家では、奉行や代官が相談をした。

「これは、若黨の二宮金次郎に家政の立てなほしを賴んではどうでせう？　あれは、忠實な若者であるし、經濟のことにかけては、中々の通人で、近ごろ、五常講などといふものをつくつて、家中の者に、金錢の融通をしてゐる。聞けば、あれは、一俵の米をもとにして、潰れた家を興したさうだ。あれに賴んだら、名案が出るかも知れない。」

といふ意見を述べた人があつた。

（若黨のやうな身分の低い者に、家老ともあらうものが、家政を任せるのは……）

と思つた者もあつたが、もはや躊躇してゐる場合ではなかつたので、みんな前の意見に贊成した。

服部家では、金次郎を呼んで、家政の整理を依賴した。金次郎は、固く辭退した。

「わたくしは百姓です。百姓の仕事を勵んで、つぶれた家を興しましたが、どうして、御家老さ

まのお家のことなどがわかりませう。」

服部家の主人は、金次郎の言葉を聞いて、ますます奥ゆかしく思ひ、再三懇望した。そこで、金次郎は、

「御家老さまのやうな身分の高いお方が、たゞの百姓のわたくしに、それほどまで望みをかけてくださるのは、もつたいないことです。それでは、お引受けいたしませう。」

と、やうやく承諾した。金次郎は、一たん歸宅して熟考し、再び服部家の主人に面會して、

「これから五年の間に、お家の財政を立て直しませう。それについては、失禮ながら、一切わたくしが申し上げるやうにしていたゞきたうございますが、いかゞでせう？」

と、念を押した。主人は、

「わしが不才のために、このやうに家運を衰微させてしまひ、百計盡きて、お前に依頼するのだ。わしは、何にもいはない。お前の思ふ存分に改革してもらひたい。」

と答へた。

そこで、金次郎は、はじめて自分の意見を述べた。

「御當家は、祿千二百石といひながら、實際の祿米四百三俵、それに負債が數百兩と仰せられる。さうして見ますと、祿はあつても、既に他人の所有になつてゐるやうなものです。祿のない者が祿ある者のやうに信じておいでになる。それは、あさましいことです。今までの生活を改めず、お金が足りなくなれば、借りて來てこれを補つてゐては、ますます借金が增加するばかりです。今の場合、最も肝心なことは、今までの生活を改めて、借金を返濟することです。そこで、御家老さまにお伺ひ申します。これから、(一)食は飯汁に限ること、(二)衣服は綿服に限ること、(三)必ず無用のことを好まない。この三箇條をお守り下さるか如何？」

主人は、直に答へた。

「それくらゐなことは何でもない。必ず守ることを誓ふ。」

金次郎は、更に服部家の下男下女を集めて、

「みなの知つてゐるとほり、御當家は、負債が增加して、家計が頗る困難に陷つてゐる。そこで主人は、その整理をわたくしにお任せになつたのだ。みなのうちによい考へがあるならわたくしに教へてください。さもなければ、五年の間、わたくしの指圖どほりに働いてもらひたい。」

といひ出した。一同は、みな金次郎の指圖に從ふことを誓つた。

かくして、はじめて、金次郎は、服部家回復の仕法を立てた。仕法といふのは計劃のことである。金次郎は、服部家の財政を詳しく調べ、收入よりも支出を少なくするやうに、なるべく節約をして無用の雜費を省いた。さうして、年々、少しづゝ殘つたお金で、今までの借金を返濟して行くことにした。金次郎は、お金の貸主を呼んで、事情を話して、五年間に負債の全都を償還するといふ約束をした。自分は下男や下女と同じやうに働いた。主人が外へ出る時には若黨となつてお供をし、夜になれば、家を治め國を治める道を說いて聞かせた。

仕法について、こゝで詳しく述べることは出來ないが、金次郎の苦心によつて、服部家の財政は、だんだんと順調に向ひ、五年たつと、借金が悉く洗ひ盡されたのみならず、三百兩ほどのお金があとに殘つた。服部一家の喜びは、譬へやうもなかつた。

金次郎は、三百兩のお金を主人の前にさし出して、

「五年の間、わたくしの申し上げたとほりに、ようこそ御辛抱くださいました。これで、御當家の負債は、すつかりなくなり、こゝに三百兩のお金が殘りました。百兩は御主人さまのお手許に

百兩は、奧方さまのお手許にお備へ置き下さつて、非常の場合の御用にお立てなさるやうに。さうして、殘る百兩は、自由におつかひ下さいませ。」

といつた。主人は、金次郎の潔白な心に深く感じ入り、

「今日のやうに家の復興が出來たといふのも、みなお前のお蔭である。五年の間、家業を棄てゝ當家のためにつくしてくれたお禮としては、少ないけれど、百兩だけは、お前にあげる。快く受け取つてもらひたい。」

といつた。金次郎がいくらことわつても諾き入れないので、

「それでは、ありがたく頂戴いたします。」

と、金次郎は、百兩のお金を受取つて、退いたが、下男下女を呼んで、

「よくわたくしのいふとほりに働いてくれました。御當家もこれですつかりもとどほりになつた。これは、御主人さまからの御褒美だ。」

といつて、もらつたお金をみな分けてやり、一文も持たずに、瓢然と栢山の家へかへつて來た。

名聲藩内に聞ゆ　金次郎は、三十一歳の時、服部家の仕法にかゝる前年に、堀内村の中島彌之右

衛門の娘キノといふ者を妻に迎へたが、三年目に離縁し、更にその翌年、三十四歳の時に、飯泉村の岡田峯右衛門の娘波といふ者と再婚した。先妻を離縁したのは、金次郎が、服部家の仕法に沒頭し、家事をかへりみなかつたので、妻の方から離縁を申し出たのであるといふ。後妻の波は、服部家に仕へてゐた者、後に歌と呼んだ。二宮先生の事業をよく理解して、内助の功を立てた賢夫人といはれてゐる。

金次郎が、服部家の仕法にかゝり、着々と成績を擧げたので、小田原の藩士は、非常に驚き、寄るとさはると、金次郎の評判をした。金次郎の名聲は、藩内に聞えて、だれ知らぬ者もないほどの人氣者になつた。

かくして、栢山の百姓金次郎も、二宮先生と尊敬せられる身分となつた。

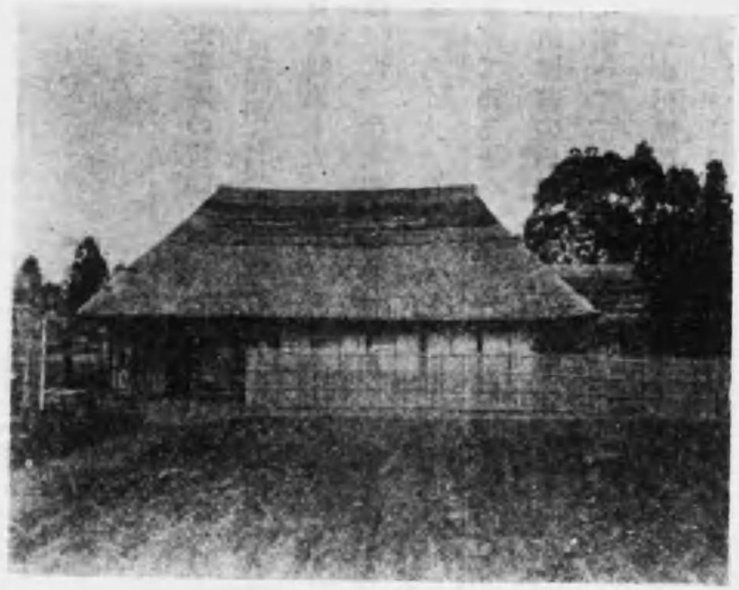
後篇

一、畢世の大事業

大事業の發端　藩内の評判は、いつしか小田原藩主大久保忠眞公の耳に入つた。當時、大久保公は、民間から民政改革の意見を求められたことがあつた。その時、金次郎は、貢米を量る桝の改正意見を提出した。當時、小田原藩の領内には、十八種類の桝があつて、絶えず種々の爭議が起つた。藩では、金次郎の意見を採用し、標準桝の作製を命じた。それらのことから、二宮金次郎の名は、もちろん大久保公にも知られてゐたであらう。その二宮金次郎が、服部家の家政整理に、好成績を擧げてゐるといふ風評は、大久保公を深く感動させた。大久保公は、(二宮に財政を處理せしめたら、小田原藩の窮乏を救ふことが出來るかも知れない。)と考へて、近臣に諮られた。けれども、みな口を揃へて、

「小田原藩の全體が、一人の百姓の指圖を受けるやうになつては、堪へられない。」

といつて、反對した。よつて、大久保公は、近臣の意見を容れて、二宮の登用を思ひ止まり、改



櫻町陣屋

めて、野州櫻町の興復を、二宮に仰せつけられた。

櫻町は、大久保公の分家に當る旗本宇津釩之助の領地になつてゐた。土地が痩せてゐて、五穀の收穫が少なく放縱無頼の民が多くて、人氣の頗るわるいところであつた。元祿年中までは四百五十戸ほどあつた戸數が、次第に離散して、文政の頃には、百四五十戸に減つてしまつた。農民は、遊惰に流れ、常に爭論や訴訟の絶えた時がないといふ難村であつた。正直に稅を納める者も少なく、宇津家は窮乏の極に達してゐた。大久保公は、これまでに度々人を遣はし、多くの費用をかけて、興復を計られたが、一度

も成功した者がなかつた。そこで、今度は、二宮にこの大役を仰せつけられたのである。

金次郎は、

「わたくしの如き、貧しい農家に生れた者に、どうして、國を興し、民を安んずる道がわかりませう。君命の重いことは知つてゐますが、不肖の身には、お引受けかねる。」

と、固辭した。ところが、大久保公は、お許しにならなかつた。再三使者をやつて、御下命になつた。その中に、三年たつたが、まだお許しにならない。金次郎も大久保公の厚い仁心に感じ、遂に辭退することが出來なくなつた。そこで、いよいよ二宮先生の大事業が序幕に入つたのである。

櫻町の興復　文政四年に、二宮先生は、櫻町を視察すること四回、土地の肥瘠、貧富の程度、人民の勤惰寺を探り、大久保公に、次のやうな意見を述べられた。

「櫻町は、土地痩瘠にして、人民の怠惰も極端です。これを振興するには、仁術の一と手があるのみです。仁政が行はれなければ、四千石の年貢を全部免除しても、決して人民を貧困から救ふことは出來ません。徒らに多くの費用を投じても、それは、結局、人民を怠惰ならしめるだけのことです。今後、金錢を費やすことをやめて、仁政を施すやうになさつたがよろしい。」

大久保公は、質問せられた。

「それは、尤もな意見であるが、多くの費用をかけても復興の出來ないものが、費用なしに出來るであらうか？」

二宮先生は、きつぱりと答へられた。

「出來ます。金錢を費やせば、役人も、村民も、金錢に目がくれて、互に自分の利益をはからうとして、醜い爭ひをはじめ、人情がますます頽廢して行きます。それよりも、荒地を開くには、荒地の力を以てし、貧乏を救ふには、貧乏の力を以てするがよろしい。例へば、荒地一反を開いて、一石の米が穫れるとすれば、その内の五斗を耕作者の食料に與へ、殘りの五斗を次の年の開墾費用とするのです。年々、さうして行けば、何億町歩の荒地も、費用なしで開くことが出來ます。」

二宮先生は更に詳しく、費用をかけずに、櫻町を復興させる方法を說かれた。大久保公は、感心して、

「それは名案である。萬事を汝に委託するから、よろしく賴む。」

と仰せられた。

文政六年三月、二宮先生は、家財道具を賣り拂ひ、栢山の家をたゝみ、夫人と三歲になる子の彌太郎とをつれて、櫻町へ移住いたされた。この大事業を成就して、君命を全うしなければ、再び故鄕の土を踏まないといふ悲壯な決心を起されたのである。

櫻町へ移住して見て、人民の墮落が、今まで考へてゐたよりも、更に一そう甚だしいことが、二宮先生にわかつた。男女の區別なく、酒を呑み、博奕に耽り、仕事もせずに遊んでゐる者が多く、人の善事を惡み、人の惡事災難を喜び、他人を苦しめても、自分の利益を得ようとして、喧嘩ばかりしてゐた。役人は、人民を虐げ、人民は、役人を憎み、互に仇敵のやうにいがみ合つてゐた。

二宮先生は、少しも屈せず、大久保公に誓つたとほり、仁政を施して人情を一變し、一鍬づゝ荒地を開いて行く方針で、夜となく晝となく、心を碎いて、領内を見廻られた。村役人の中には、表面だけ先生の指揮に從ふやうに見せかけ、蔭へまはつて、愚民を煽動し、先生を苦しめる奸惡な者もあつた。二宮先生と一しよに、小田原から派遣せられてゐる役人の中にも、二宮先生の身分を侮り、名聲を嫉み、奸惡な村役人や無賴な人民と通じて、先生の事業を妨害する不埒な者もあつた。

人民の放縱を訴へる役人、役人の非道を訴へる人民、喧嘩口論の絶えた日はなかつた。先生は、寢食を忘れて、復興事業のために力を盡された。訴訟は、双方の言ひ分をよく聽いて、理非曲直を裁斷せられた。善人はこれを表彰し、惡人はこれを說諭して、善にかへらせようと力められた。

元來、櫻町の復興は、官民の協力一致によらなければ、成功しない難事業であつた。しかるに、二宮先生よりも上席にゐる役人が、先生の計劃を妨害するのであるからたまらない。先生の獻身的な努力も、その甲斐なく、豫期した成績も擧らない中に、いつしか數年の歲月が過ぎ去つた。

復興事業がはかどらないのは、領內の戶數が非常に減じて、勞力が不足してゐることが、重大な原因であつた。そこで、二宮先生は、他國の移民を招いて、勞力の不足を補はうと企てられた。二宮先生に反對の役人は、これを一つの口實にして、「二宮は、新移民を優遇して、土着民を疏略にする。」といつて、小田原侯に讒言した。小田原侯は、餘儀なく、先生を召還して、これを質されたが、先生の誠意がわかると、前にも增して、信賴の度を加へられた。

あまりに萬事が意の如くならないので、文政十二年に、二宮先生は、成田山に參籠して、靜思默想せられた。しかるに、その後、だんだんと仕法の效果が見えて來た。先生の誠意が、多くの百姓

にも通じて、今まで事毎に先生の事業を妨害しようとした無賴の百姓も、過ちを改めて、先生の膝下に平伏した。惡い役人は職を免ぜられ、先生が主席の役人となられた。荒地は、日に月に開けて、農作物が豐かに實るやうになつた。今まで八百俵ぐらゐしか納まらなかつた年貢米が、千俵を超えるやうになつた。櫻町には、やうやく復興の曙光がさしそめた。それまでに、ちやうど十年かゝつたのである。

東奔西走——各地の仕法　櫻町の復興は、二宮先生にとつて、全く命がけの大事業であつた。この事業に成功して、二宮先生の名聲は、ますます高くなつた。さうして、各地から先生の仕法を乞ふ者が、續々と現はれて來た。それから、二十數年に亘る二宮先生の大活動を、たうていこの小冊子に書きつくすことは出來ない。今日殘つてゐる仕法書を見ただけでも、これが人間一代に出來ることかと思はれるほどである。次に、その仕法の中、最も有名なものだけを、簡單に列擧しておかう。

青木村の仕法　青木村（常陸國真壁郡）は、櫻町を距ること三里、旗本川副勝三郎の領地になつてゐた。もとは、百三十戶ほど戶數があつたが、時々、洪水が出て、櫻川の堰を流して、水田を荒したので、

次第に住民が減り、惰弱な貧民が二十九戸しかない寒村となりはてた。そこで、名主が江戸の領主に相談し、櫻町に二宮先生を訪ねて、仕法を乞ふた。先生は、最初辭退せられたが、名主の熱心に動かされて、櫻川に堰をつくり、水害を防ぎ、民俗の一變をはかられたので、數年の中に富裕な村となつた。

谷田部の仕法　常陸の國筑波郡の四十二箇村と下野の國茂木の二十七箇村は、谷田部侯細川長門守興建公の領地になつてゐた。谷田部侯は、肥後細川氏の分家であつたが、財政がよろしきを得なかつたので、十二萬兩の負債を生じた。本家の方では、八萬兩ほどの補助をしたが、效能がないので、見切つてしまつた。谷田部侯は、二宮先生の名聲を聞き、櫻町に使者を出して、窮狀を訴へ、仕法を乞うた。二宮先生は、出入の帳簿を持參せしめて詳細に調査し、計劃を立て、門生を谷田部に派して、仕法を實施せしめられた。數年たゝない中に、負債の大半を返還することが出來た。

烏山の仕法　烏山藩主大久保佐渡守は、小田原侯の一族で、烏山（下野國那須郡）地方の四十七箇村と、厚木（相模國愛甲郡）地方とを領地とし、祿高四萬石と稱せられてゐた。烏山地方は、文政の末年から、次第に衰頽して、人口が減り、荒蕪地が多くなつた。そこへ、天保七年の飢饉が襲來したので、人民の生

活は、實に慘憺たるものとなり、葛や蕨や草の根を食つて、漸く餓を凌ぐといふ有樣であつたが、藩の收入が減少してゐるために、救濟することが出來なかつた。藩士菅谷八郎右衛門は、天性寺の圓應和尚と相談して、二宮先生の仕法を仰いだ。二宮先生は、最初、固辭せられたが、二人の熱心に動かされて、承諾せられ、先づ救助米を送つて、窮民を救ひ、領内發展の仕法を示された。その結果、二三年後には、田を開くこと二百二十四町歩、米二千俵の增收を見るに至つた。

下館の仕法　下館藩主石川近江守總貨は、常陸の國の眞壁郡三十箇村、一萬四千二百二十石の外に、河内の國石川郡にも五千石の領地を有する大名であつたが、三萬兩の負債に苦しみ、天保九年郡奉行衣笠兵太夫を派遣して、二宮先生の仕法を仰いだ。再三懇願して、漸く承諾を得、その仕法により、負債を皆濟したのみならず、剩餘金を生じ、領内に窮民の跡を絶つに到つた。

小田原の仕法　前にも述べたとほり、小田原藩主大久保忠眞公は、深く二宮先生を信賴せられた。しかし、藩内には、二宮先生の仕法に反對する者があつて、櫻町の復興にさへも異議を唱へた。從つて、小田原藩は、非常に疲弊してゐるにも拘はらず、仕法の實施が容易に行はれなかつた。しかるに、天保七年の飢饉には、たうとう先生の力を借りなければならなくなつた。小田原藩では、二

宮先生に出府を命じた。二宮先生は、

「わたくしは、櫻町の復興が完了しなければかへらない約束をして來た者です。この凶時に上京することは出來ない。御用があらば當地までお越し下さい。」

といふ返辭をせられた。使者は、大に怒つて歸り、藩主に復命した。明君大久保公は、「二宮のいふことは理の當然だ。」といつて、「小田原の人民を救ふために枉げて出府せよ。」といふ再度の命令を下された。

二宮先生は、天保七年十二月、出府せられた。それから、飢饉の救急、難村の立て直し等に努力せられた。これが小田原に仕法の行はれた發端である。

天保十年、頻死の難村曾比・竹松の二村（共に足柄上郡）を忽然と一新せしめてから、約十年間に仕法を實施して好成績を擧げた村は、七十餘の多きに及んだが、弘化三年、突然仕法擱置を命ぜられ、先生の事業も、反對者の妨害により、こゝに一旦中絶した。

その他の仕法　二宮先生の仕法を仰いだ大名や旗本は、その他にもなほ非常に多くあつた。二宮先生の仕法によつて復興したものは、大名や旗本の領地ばかりではなかつた。先生の教訓を受け

て、家政を整理し、廢家を再興した者は、數へきれないほどたくさんあつた。横田村（下野）の名主圓藏、伊勢原（相模）の加藤宗兵衛、大磯（相模）の川崎屋彌右衛門の話などは、今日でも美談として傳へられてゐる。

幕府の登庸——日光の仕法　櫻町の復興により、二宮先生の名は、天下に轟きわたつた。天保十三年七月、江戸の小田原藩邸から急使が櫻町に到着した。書面には、

「水野越前守様から御沙汰につき、早々、出府いたすやうに。」

といふ意味のことが書いてあつた。

二宮先生は、すぐに出府せられた。さうして、幕府に仕へることになつた。時に、先生は、五十六歳であつた。

間もなく、先生は、幕府から下總へ出張の命を受け、富津の陣屋に至り、利根分水路、印旛沼、手賀沼を視察踏査してかへられた。幕府では、代官篠田藤四郎の請願により、先生に印旛沼開鑿の大工事を計劃せしめるつもりであつたが、實地踏査の結果、それは、到底行はれないことがわかつた。

天保十四年、眞岡に駐在を命ぜられ、その翌年(弘化元年)日光神領仕法の大命が下つた。先生は大に喜び、「今度は、その土地限りの施設でなく、何れの土地にも適する仕法の標準を作らう。」といつて、その立案に沒頭せられた。三年後に出來上つた仕法雛形は、六十四冊といふ大冊子であつた。當時幕府の實力が衰頽して來たので、苦心してつくり上げた仕法雛形も、提出してから、何の音沙汰もなかつた。先生の失望が思はれる。

それから八年たつて、嘉永六年二月、漸く日光神領二萬石、八十九箇村の仕法を命ずるといふ沙汰があつた。門人たちは、手を拍つて喜んだ。しかし、先生は、既に六十七歳、天壽漸く終りに近づいてゐたのであつた。

二、榮光は輝やく

二宮先生の臨終　日光神領仕法の大命が下つたその年(嘉永六年)の四月十八日、二宮先生は病氣に罹られた。先生は體格が頑丈で、非常に壯健な人であつたが、心身の過勞の結果、遂に病床に臥する身

となられたのである。眞岡附近の人々は、大に憂慮して、平癒を神佛に祈つた。

五月、幸に全快したので、先生は、日光に入り、三箇月の間、山野を跋渉して、仕法に着手せられたが、間もなく、病氣が再發したので、また病床の人となられた。それから、約三年越し、病氣は、起伏をなして、だんだんと重くなり、安政三年十月二十日の朝、遂に逝去せられた。その時、先生は、七十歳であつた。遺族は、歌子夫人(五十二歳)と、令息彌太郎尊行(三十五歳)の二人きり、門人富田高慶夫人となつた娘ふみは、三年前に難產で死亡してしまつた。

報德教——萬世不易の實行精神　二宮先生の一生涯は、苦難と奮鬪の連鎖であつた。栢山の百姓であつた幼年時代の苦難、櫻町復興當時の決死的な奮鬪、それらの話は、如何なる者にも、興奮感激を與へる。先生の一生涯は、安樂なものでも、幸運なものでもなかつた。最も得意な時代、幕府に用ひられた晩年でさへも、先生の身分が低いために、絕えず迫害や侮蔑を受けた。寢食を忘れて立案した仕法が、握り潰されるといふこともあつた。非難中傷する小人もたくさんあつた。しかしその高潔な人格と、偉大な實行精神とは、歿後に於て、俄然、光りを發し、しかも、歳月を經るに從つて、ますます光りを增して行く。

二宮先生が我れを忘れ、家を忘れて、救世濟民の大事業に從事しつゝ、折にふれて、門人や訪客に漏らされた貴い教訓は、報德教といふ名の下に、永く傳はるに至つた。

報德教は、二宮先生の學說でもあり、哲學でもあり、宗教でもある。二宮先生の人生觀も、處世觀も、社會觀も、みなこの中に含まれてゐる。前にも述べたとほり、二宮先生の學問は、普通の學者の學問とちがふ。書物の中の道理を自分の經驗に結びつけて、實際の世の中に適用しようといふ活きた學問である。故に、學說といつても、机の上でつくり上げたむつかしい理窟ではない。先生は、むつかしい言葉を並べて、議論のために議論をするやうなことを、大そう嫌はれた。教へを乞ふ者があれば、いつも直に世の中に役に立つやうな教訓を、極めて巧妙な例をひいて語られた。その教訓が、報德教の眞髓であるから、報德教は、一つの實行精神といつてよろしい。二宮先生の高潔な人格と、複雜な經驗と、徹底せる學識とが生み出した實行精神である。これは、支那の學問ともちがふ。印度の佛教ともちがふ。日本人の思想や信仰に、支那の學問や、印度の宗教を採り入れて、その上に組み立てた實行精神である。その點で、報德教は、獨創的な一種の思想ともいはれる。

二宮先生自身が、組織立てゝ報德教を說かれたのではないから、報德教を簡單に明瞭に說明することは、困難である。しかし、二宮先生の事業と訓言とによつて、何が報德教の根本であるか、報德教の趣旨がどこにあるか、といふことは、大てい推察が出來る。

報德教は、實際の世の中の役に立つ實行精神である。空理空論ではない。これを實行すれば、貧しい者は富み、衰へた者は榮える。そこに、報德教の本領がある。家を富まし、國を富まし、人間の社會に、希望と幸福とを齎すもの、それが報德教である。しからば、報德教は、單なる金儲けの術であるか？といふに、さうではない。根本となつてゐるものは道德である。宗教である。正しいと思ふ信念を實行して、經濟的の利益を收めようとするのが、報德教の特色である。

報德といふのは、天地人三才の德に報いるといふ意味である。どうして、天地人三才の德に報ゆるか？　それは、人道を盡すにある。人道とは何であるか？　人道の極致は、至誠と勤勞と分度と推讓の四つであるとして、これを報德教の四綱領とした。至誠といふのは、私慾を去つて、良心の命に從ふこと、勤勞といふのは、自然に打ち勝つて、人類の繁榮をはかること、分度といふのは、天命の定分に從つて、法度を立てること、推讓といふのは、餘れる分を他に讓ること、これを平易にいへば、まごゝろをとめ、せい出して働き、分に應じて節約し、餘つたものを他に讓れ、といふこ

とになる。かういふ一つの信念を押し通し、時と場合に應じて、人を救ひ、人を教化するものが、報德教である。二宮先生は、この實行精神を實現して、驚くべき實蹟を擧げた偉人であつた。道德や宗教と經濟とを、これほど固くと結びつけた學說を唱へたのみならず、その學說を實行して、これほど大きな業蹟を擧げた學者が、世界中にあらうか？　この點からも、二宮先生は、日本文化のために誇るべき偉人である。

人を救ひ、國を富ませること、その方法は、時勢に伴つて變化するであらう。しかし、その精神は、人間の生存するところ、永久に必要がある。報德教は、萬世不易の實行精神である。今日の如く、非常時の聲が高く、農村の荒廢が叫ばれ、天災地變がしきりに至る時に於て、この實行精神が、國民に訓ふるところは、少なくないであらうと信ずる。

榮光は輝やく——報德二宮神社　二宮先生の功勞を思ひ、德望を慕ふ者は、歿後、次第に多くなつた。門人の富田高慶・福住正兄・岡田良一郎等の人々は、先生の言行を記錄し、且つ報德の教義を天下に宣傳した。門人の努力は、二宮先生の人格と事業とを、後世に正しく認識せしめた。それが一つの原因となり、明治二十四年には、御贈位（從四位）の御沙汰があつた。つゞいて、神社創建の計

劃が成り、明治二十七年には、小田原報德二宮神社の遷宮鎭座式が擧げられ、同三十年には、今市報德二宮神社の遷宮鎭座式が行はれた。さうして、今市報德二宮神社は同三十三年に、小田原報德二宮神社は同三十九年に、何れも縣社に列するに至つた。その他、北海道豐頃村の報德道場にある遙拜所も神社となり、櫻町の陣屋にある小祠も、最近村社として奉祀せられることになつた。全國各地の工場や學校には、二宮先生を奉祀せるもの、二宮先生の銅像を建設するものが最近非常に增加した。

栢山の農家に生れて、貧苦の間に成長した二宮先生は、かうして、遂に、萬民から永遠に追慕せられる國民的偉人となつたのである。

三、偉大なる農聖

全日本國民に敬慕せられる偉人　二宮尊德先生！　この名を知らない者は、今日の日本國民中に恐らく、一人もなからう。二宮尊德先生のお話は、尋常小學校の修身書に出てゐる。唱歌にも歌は

れてゐる。故に、小學校へ入學した者は、だれもみな、先生から二宮先生のお話を聞く。まだ小學校へ入學しない幼ない兒でも、兄さんや姉さんがうたふ歌を聞いて、二宮先生の名を知つてゐるであらう。

古來、わが國には、英雄といはれ、偉人と呼ばれてゐる人がたくさんあるが、二宮尊德先生ほど國民全體に親しみ深い偉人は、尠なからうと思ふ。多數の國民から、尊敬と愛慕の念を以て迎へられる偉人を、假に國民的偉人と名づけるならば、二宮尊德先生は、まことに、近世の日本に、明星の如く鮮やく典型的の國民的偉人である。

二宮先生はたゞの百姓の子　二宮先生は、しまひに、大學者となり、世の中のために、いろいろ有益な事業を起して、多くの人々を助け、死後、報德二宮神社に祀られ、小學校の修身書に傳へられて、國民全體から敬慕せられるほどの偉人となられたが、身分の貴い家に生れた者でもなければ、大臣や大將のやうな高位高官に昇つた人でもない。東京からあまり遠く隔つてゐない、今の神奈川縣足柄上郡櫻井村栢山といふさびしい田舍の百姓、しかも、極めて貧しい百姓の家に生れ、幼ない時から、まことに、血を吐くやうな艱難辛苦と戰ひ、その間に學問を勵み、一たん潰れた家を興し

た、立志成功の模範的人物である。さうして、大先生と仰がれるやうになつてからも、百姓の心を失はず、一生涯百姓と同じ生活をした人である。英雄や偉人といへば、何となく、われわれと遠くかけ離れた世界の人間のやうな氣がするが、二宮先生だけは、隣人のやうに思はれる。かういふ偉人には、また農聖といふ名をつけることが出來るであらう。

二宮先生は活きた學者　偉い人の中にも、いろいろ種類がある。例へば、千軍萬馬の間を往來して、武勳赫々たる大將軍も、偉い人である。善政を施して、萬民の安泰を圖つた大政治家も、偉い人にちがひない。しかし、さういふ軍人や政治家だけを偉い人と思ふのは、大へんな考へ違ひである。どうかすると、世間の人は、大臣や大將のやうに、高位高官に昇り、たくさん勳章でもつけてゐなければ、偉い人のやうに思はないことがある。それは、甚だ淺はかな考へである。軍人や政治家の活動は、如何にも華々しく、人の眼につきやすいところがある。それと反對に、學者や、教育者や、宗教家の事業は、中々、容易に世間の注意を惹かない。しかし、多くの人々の注意を惹かない學問や教育や宗教のやうな質實な事業に全身を打ち込み、文化の上に足跡を殘す人々も、軍人や政治家に劣らぬ偉人といつてよからうと思ふ。

二宮先生は、日本の文化の上に大きな貢献をした學者である。普通、學者といへば、内外の書物を多く讀み、書物の中にあることをよく記憶してゐる物識りのやうに考へる。ところが、二宮先生は、多くの書物を暗記してゐる物識りでもなく、むつかしい書物を上手に講義して聞かせる先生でもなかつた。書物にあることを十分に咀嚼して、自分の經驗に結びつけ、これを實地に應用し、貧しい家を富ませ、潰れかゝつてゐる身代をもとの通りに恢復して、大ぜいの人を助けた學者である。かういふ學者を活きた學者といつてよからう。昔から、學問のよく出來る學者、即ち書物の讀める者や、達者に文字を書く者や、記憶力の強い者は、何百人あつたか、何千人あつたか、數へ盡せないほどであるが、活きた學者が幾人あつたであらう。そこが二宮先生の偉いところである。

現代社會への大きな教訓　二宮先生は、先生を敬慕して集まつた大ぜいの門人に、貴い教へを說かれた。その教へは、報德教といつて今日でも殘つてゐる。世の中のために、まことに有益な教訓で、歲月を重ねるに從つて、だんだん光りを放つて行く。かくの如く、二宮先生は、後世にりつぱな教へを遺されたが、たゞそれだけではない。よく考へて見ると、二宮先生の一生涯そのものが後世の人々に、何よりも大きな教訓である。

貧しい百姓の家に生れ、さまざまの艱難を嘗め、刻苦勉勵して、りつぱな學者となり、一家を興し、社會のために盡し、神に祀られて、國民敬慕の偉人として、その名を萬世に傳へた二宮先生のお話を聽いて、諸君は、何と感ずるか？　これに發奮興起しない者は、氣慨ある日本人といへないであらう。日本人に對するこれ以上の大きな教訓はあるまい。

輓近の時勢と二宮先生　輓近、わが國に於ては、國運が著るしく進歩して、國際關係が複雜となり、内政上にも革新を要する問題が多くなつた。國家の使命、國民の責任がいよいよ重大となれる現代の日本に、農聖二宮尊德先生の神靈は、深甚の加護を垂れたまふことであらう。國民は、この偉大なる農聖の足跡をかへりみて、現代に處する道を求めなければならない。

—終—

二宮尊德年譜

紀元	年號	年齢	要項
二四四七	天明七	一	七月二十三日朝(太陽暦九月四日)誕生。
二四五〇	寛政二	四	八月二十八日弟友吉(後に常五郎又は三郎左衛門)生る。
二四五一	〃 三	五	八月六日關東大風雨。酒匂川堤防決潰して數村流亡。 利右衛門(父)の田地殆ど荒地となる。
二四五三	〃 四	六	利右衛門負債を起し、成田を質として開墾に從事す。
二四五六	〃 八	一〇	正月、大久保忠眞封を襲ぐ。(小田原領十一萬三千九百二十九石)
二四五七	〃 九	一一	利右衛門病に罹る。村の醫師の治療を受けて癒ゆ。
二四五八	〃 一〇	一三	利右衛門再び病む。金次郎代りて酒匂川堤防工事の夫役に出づ。 夜業に草鞋を作りて之を配り自らの力の不足を補ふ。
二四五九	〃 一一	一三	十二月晦日次弟(三男)富次郎生る。

二四六〇	〃 一二	一四	九月廿六日利右衛門歿す。享年四十八。 父の歿後、一度末弟富次郎を西栢山の奥津甚左衛門に托したりしも、又呼返し、以來晨起久野山矢佐芝山に薪を伐り、夜は深更まで草鞋を作りて四人の生計を立つ。此の頃既に聖賢の學に志し、採薪の途次大學を繙く。
二四六一	享和二	一六	貧困甚だしく、正月大神樂來るも十二銅の金なく、戸を閉じて免る。三月廿四日外祖父川久保太兵衛歿す。 四月四日母よし歿す。享年三十六、六月晦日酒匂川又洪水あり。七段五畝廿八歩の田地を悉く流失す。母の中陰終へて一家離散し、二弟は母の實家川久保太兵衛家に金次郎は伯父萬兵衛の家に寄食す。
二四六二	〃 三	一七	一家再興の志を立てゝ奮勵努力し、餘暇に仙了堤に油菜を植ゑ、菜種七八升を得、夜學の燈油に代ふ。此の年用水堀の空地に棄苗を植ゑて米一俵餘を得。
二四六四	文化元	一八	二月萬兵衛方を辭し同村親族岡部伊助方に在り。農耕の餘暇習字讀書の指南を受く。 此年餘耕の米五俵を得たりと云ふ。 十月飯泉觀音堂に旅僧の觀音經をきゝて大いに感ず。
二四六五	〃 二	一九	此年岡部方を辭し同村名主七左衛門方に寄食す。 同餘耕の米廿俵を得たりと云ふ。
二四六六	〃 三	二〇	二月七左衛門方を辭して獨居日夜業を勵む。 三月亡父の買入地九畝十歩を買戻す。

二四六七	〃 四	二一	六月五日弟富次郎川久保家に死す。享年九歳。
二四七二	〃 九	二六	服部家に若殿付の仲間として勤務す。
二四七四	〃 二	二八	弟友吉(二十五歳)別所より自宅に復歸す。
二四七五	〃 三	二九	服部家の信頼愈々篤く其の懇望により同家財政整理の仕法案を立つ。
二四七六	〃 一三	三〇	弟友吉萬兵衛の本家三郎左衛門の養子となる。
二四七七	〃 一四	三一	二月廿七日堀の内中島彌右衛門の女キノ(十九歳)を娶る。
二四七八	文政元	三二	八月二日忠眞公關老となる。服部家の仕法着手。
二四七九	二	三三	此年妻キノ家風に合ふ能はずとて離別を乞ふ。
二四八〇	〃 三	三四	四月二日飯泉村峰右衛門女波子(十六歳)を娶る。 九月領主大久保公民間の言議を徴す。金次郎貢米領收用斗桝の改正の議を献じたるに十月命を受けて斗桝を改正し賞として貢一年加免ぜらる。
二四八一	〃 四	三五	八月朔日宇津飢之助領櫻町四千石の見分を命ぜらる。 九月廿五日長男彌太郎誕生す。
二四八二	〃 五	三六	櫻町復興を命ぜらる。九月赴任。
二四八三	〃 六	三七	三月十三日舉家櫻町に移る。

二四八六	〃 九	四〇	徒格に取立て五石二人扶持を給せらる。文子生る。
二四八九	〃 一三	四三	三月十七日成田山に斷食祈願。
二四九一	天保二	四五	櫻町成功。旗本川副勝三郎所領常州眞壁郡青木村を救濟す。
二四九三	〃 四	四七	凶作を豫知して領民を救ふ。青木の堰を築く。
二四九七	〃 八	五一	二月小田原領飢民救助に着手す。 三月十九日大久保忠眞卒す。烏山仕法開始。
二四九八	〃 九	五二	小田原仕法開始。二月足柄下郡鶴ノ宮三新田に仕法發業。
二四九九	〃 一〇	五三	下館藩仕法開始。曾比竹松仕法發業。十一月中村藩士富田高慶(二七歳)入門す。
二五〇〇	〃 一二	五四	門人大に進み在塾常に百名を下らず。
二五〇二	〃 一三	五六	十月幕府普請役格に任じ、切米廿俵二人扶持を給せらる。十月利根川分水路見分。同印旛沼を見分す。
二五〇四	弘化元	五八	日光神領起返し見込調査を命ぜらる。
二五〇五	〃 二	五九	相馬中村藩仕法着手。十月福住正兄(大澤政吉)江戸に來り入門す。
二五〇六	〃 三	六〇	日光神領仕法雛形六十卷を獻ず。七月十六日小田原仕法疊置。五月東郷に移る。

二五一三	嘉永六	六七	二月日光神領仕法を命ぜられ十二月着手。四月病に罹る。小田原藩醫松本良庵診斷す。七月七日文子死亡。
二五一四	安政元	六八	彌太郎(尊行)普請役格見習を命ぜらる。此年岡田良一郎入門す。
二五一五	〃 二	六九	今市の新築舍に移る。
二五一六	〃 三	七〇	二月御普請役に進められ三十俵三人扶持を給はる。三年前より病に罹ること數度此頃病勢再び募る。十月廿日急變あり己の中刻遂に歿す。(太陽曆十一月十七日)同廿三日今市星顯山如來寺(淨土宗)境内に葬る。
二五二一	文久元		彌太郎普請役元締格に進む。
二五二七	明治元		幕府倒る。彌太郎相馬氏の客分として厚遇さる。
二五三一	〃 四		七月一日波子夫人歿す。享年六十七歳。十二月朔日二宮彌太郎歿す。享年五十一歳。
二五五四	〃 二七		四月十四日小田原報德二宮神社創立。

昭和十年九月三十日 印刷
昭和十年十月十日 發行

農聖二宮尊德
定價 拾錢

著作者 財團法人 社會教育會
發行者 縣社報德二宮神社 東京市小石川區丸山町一四 片岡重助
印刷者 東京市神田區錦町三ノ一七 白鳳社印刷所

不許複製

頒布所 東京市麴町區 裏霞ヶ關四 社會教育會館
振替 東京五五三五〇番

終